

みなと珍喜劇

読者からの聴き取りを元に地元作家・青木健一氏が綴る『当地喜劇』シリーズ。第一弾は長崎生まれの男性が辿った波乱万丈の博打&奉仕人生。本紙終刊につき初回から全編掲載します。

長崎は今日も晴れた（全）

もと港区民の私、渡部好雄は現在、大阪市鶴見区諸口の市営住宅に住んで七年になります。高齢ゆえ年々体力の衰えを自覚し、十数年間、苦楽を共にした九十一歳の連れ合いを近くの病院に見舞い、自らも介護サービスを受ける毎日ですが、わずかな年金を糧に人並みの老後を過ごしていることに心から感謝しています。

そんな生活の中、いつも私の思い出話を聴いてくれる港区三先の木村豊治という友人が、それを「文字に残した」と勧めてくれました。確かに私は自分でも、起伏ある人生を生きてき

たように思っていました。そんな経験は自分の胸にしまったまま墓に入ることに決めていたのです。が、熱心な勧めに心が動きました。

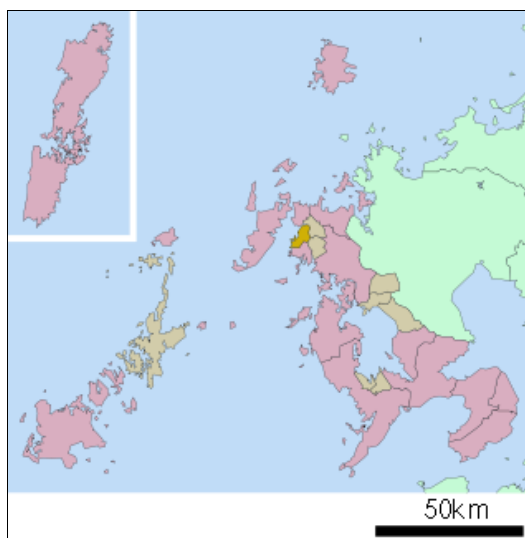
故郷・長崎での幼小期から青春期。誘われるように出てきた大阪でのその後。炭鉱労働から港湾労働へ、博打暮らしからお尋ね者へ、建設労働から更生施設暮らしへ…。常人の全うな歩みとはほど遠い足取りながら、そこには、皆が貧しいながらも助け合って生きた心豊かな人間関係があり、愛と涙と笑いに満ちた人間ドラマがありました。いわば戦争という悲劇を挟んで皆が必死に生き抜いた、昭和という時代が映されていたように思います。こうした一人の名もなき人間の歴史から、今の難しい平成の世を生きる人たちが少しでも何かを感じてくれたら——そう考え、読者の皆さんに思い切って語ってみることにしたのです。

一、長崎での幼少く少年期

●長崎県の炭鉱村に生まれる

私は昭和四一九九年一月十八日、長崎県北松浦郡鹿町村大加勢区（現・佐世保市）に生

←長崎県北松浦郡鹿町村の位置（柿色部分）



まれました。五人兄弟姉妹（女・男・男・男・女）の第三子で次男でした。一番上の姉は大正十三（一九二四）年生まれで、一番下の妹まで十二歳の年齢差がありました。

鹿町村は長崎県の北方、北松浦半島の西の端に位置する農業と漁業と鉱業の村。当時の人口は約二万人、世帯数は約一千。東西一キロ、南北十キロほどの広さの中に大加勢、加勢、歌ヶ浦、深江、北鹿町、南鹿町など十二の地区がありました。また村内には四つの炭鉱があり、その

● 四年生の思い出

そんなガキ大将時代で、今もよく覚えている出来事にこんなことがありました。それは尋常小学校四年生の時、朝、校門(杉の木で造られていました)を潜った途端、その陰に隠れていたクラスの男女二、四十人が「おはよう!」の掛け声とともに、一斉に私に襲い掛かったのです。さすがの私もたまらず、完全にその下敷きになってしまいました。そこへ現われたのが担任の先生でした。先生は皆に教諭すように言いました。「はい、終わり!」と「じや、どきやん強か!」でも大勢の力は合わしたら、やつつけられるちゅうこと、分かったじや」と。

● きつかった父のお仕置き

「こんな私の悪業ぶりに、さすがの父も手を焼き、普段は細かいことを言わないものの、いったん事を起すと、竹刀で頭を容赦なく叩きました。もちろん急所は外すのですが、とにかく痛くて、しばらくは風呂で頭を洗う時など、ひりひりしてたまらなかったのを覚えています。そんなお仕置きの中でも、特にきつかったのが、母に逆らった時でした。竹刀で叩かれるだ

けでなく、家から放り出されるのです。そんな時、私は洞穴のような場所を見つけて、そこで夜を明かし、翌朝、近所の人に見つかって、ようやく家に帰ったものでした。が、いくら悪さをしたといっても、可愛い我が子、父は随分と心配し、また、厳しく処したことを後悔してもいたことでしょう。

● 戦争深まり、統制強まる

そんな中、昭和十二(一九三七年)七月八月、小学校二年生の夏に、日本は盧溝橋事件、上海事変などから中国との全面戦争に突入。さらに昭和十六(一九四一年)十二月八日、六年生の冬には、真珠湾攻撃を台図にアメリカやイギリスとの間でも戦端が開かれ、いわゆる太平洋戦争が始まりました。こうした戦争の深まりにつれて国家総動員法(昭和十二年四月公布)などによる物資や思想の統制が強まり、国民生活はその隅々まで神国日本の勝利を優先して営まれることになりました。

鹿町村では、各部落の中に十、十五戸から成る隣組(隣保班)が計二百以上組織され、軍事物資の供出や統制物資の配給、防空演習などに

動員されました。また村議会や部落会に対する村長の権限も強まり、議員選挙では村長が推薦した者しか立候補できない仕組みになりました。

● 炭鉱採しに北支への旅に

やがてその戦争もたけなわの昭和十七(一九四二年)春、前年に尋常小学校を卒業してから就職もせず、花札に現を抜かしていた十三歳の私に、大変な仕事(舞い込み)が舞いました。それは、北支(中国北部)への炭鉱採しの旅でした。

当時はまだ日本軍が南方などへ破竹の勢いで進撃を続けていた時期でしたが、如何せん石油をはじめとする資源の乏しさが、その後の戦争継続に大きく影を落としていたため、新しいエネルギー源を見出すことは国家の至上的課題とされていました。それで長崎の軍隊にも「占領地の中国で新しい鉱山を見つけよ」との指示が出されたのでしよう、東入出で三十代後半くらいの松尾という地質学者を隊長として、技術者に軍人も加えた二十数人の探索隊が結成されたのです。そしてどういつ訳か、恐ろしく村会議員をしていた父との繋がりからと思われませんが、松尾隊長から私に直々、「一緒に行くか」との

誘いがあつたのです。血気盛んで「日本の勝利のために何か役立ちたい」と思っていた私はもちろん「二つ返事で引き受けました。」

● 過酷だが充実していた探索活動

「二つしてメンバーがそろつた探索隊は、ほどなく長崎港を出航、一日ほどで遼東半島の先端に近い日本軍の拠点港・大連に到着しました。船旅は初めてでしたが、技術者の中には対馬海峡の荒波にゲージ吐く人も出る中、幸い船酔いもせず、「坊主、よう頑張つたな」と兵隊さんから褒められたのを覚えています。

そして大連からは鉄路で数日かけて、北京の西二百五十キロ、万里の長城から二十数キロ南、ちょうど秋田県や岩手県と同じ北緯四十度付近に位置する大同(中国名「タートン」)に着いたのです。この地は既に古くから炭鉱として良質の石灰を多く産出していましたが、昭和十(一九一九)年十月に日本軍が占領して以来、さらに新しい鉱脈がないかと探っていたのでした。

現地には宿舎らしい宿舎もな／＼、一行は粗末な小屋に寝泊まりし、そこを拠点にほぼ二年間探索を続けました。小屋は「階建て」でしたが、

「日本軍占領時代の大同炭鉱。我々はさらに新しい鉱脈を求めて周辺で探索を続けた」



一階には大小便を外へ落とす方式のトイレがあるだけで、ほとんど使わず、一階を五つほどの部屋に分けて、そこに数人ずつが雑魚寝しました。私の隣には、私を守るためだつたのでしよう、いつも兵隊さんが寝てくれました。

そんな生活の中、最年少の私はもちろん探索の主力ではありませんでしたが、持ち前の勘の良さや体のすばいさを生かして技術者たちの手元を務め、けっこう重宝されたものでした。そして、苛酷ながらも「お国のために何としても新しい鉱脈を見つけたのだ」という高い目的に支えられ、皆の気持ちも一つになった充実の数カ月が過ぎたのですが、その頃になって、

思わぬ事件に巻き込まれたのです。

● 夜襲の中国兵を刺殺

それは一日の探索活動を終えて入浴や夕食を済ませ、ほぼ全員が寝込んだ時でした。中国兵が夜襲をかけてきたのです。この時、もし敵のラッパの音が聞こえなかったらどうなっていたか、考えるだけでも恐ろしい結果になったでしょう。が、どういつ訳か、恐ろしく士気を鼓舞するためだつたのでしよう、彼らは直前にラッパを吹き鳴らしたのです。そのお陰で我々は一斉に飛び起きることができました。

隣に寝ていた兵隊が私に「あつちの部屋へ逃げろ!」と怒鳴りました。私は素早くその銃剣を握り、裸足のまま隣の部屋へ走りました。ところがそこへ中国兵の一人がほぼ同時に入ってきたのです。相手との距離は「一歩ほど」。まさに鉢合わせでした。その部屋に居合わせた牧山上等兵の「早く突かんか!」の叫びに私は反射的に銃剣を構え、間髪入れず突き出しました。ズボットという音と共に中国兵の腹部に剣先が吸い込まれ、背中へ抜けたのが分かりました。初めての経験で、しかもこんな簡単に人体を突

き通せるとは思ってもいなかったもので、そのままの姿勢で茫然としていて、牧山上等兵がまた叫びました。「早く抜かんか!」。が、銃剣を引くと中国兵の体も一緒に手前へ倒れかかってきます。「アホ、蹴って抜くんや!」。私は夢中で右脚を上げて足の裏で目の前の体を突き返し、その反動でようやく銃剣を抜くことができました。中国兵は私が蹴った勢いで向こう側へ仰向けに倒れました。

後にも先にも、私が人を殺したのはこの一回きりでしたが、時間にしてわずか数十秒の間、この中国兵がどんな顔でどんな表情をしていたか、まるで記憶にありません。雰囲気からして何となく年齢は三十代半ばくらいだったようです。とにかく、やらなければやられるということで、必死、というより無我夢中でした。ただ、この思わぬ経験が後年、ヤクザとの喧嘩などで、いわば胆力が問われる様々な場面で役に立ったのは、皮肉と言えは皮肉でした。

ともあれ、この戦闘で、襲ってきた中国兵十数人が死に、日本側も、私の隣に寝ていた兵隊を含む二人を失いました。遺体は羽朝、小屋の

そばに穴を掘って埋め、ガソリンをかけて焚火に付しました。

● 目的果たして帰国

こんな事件を挟みながらも、探索活動は順調に進み、我々の隊は何力所かの新しい鉱脈を発見するという所期の目的を果たし、昭和十八(一九四三)春、無事、日本への帰途に就いたのです。

ちなみに中国では戦後、この大同炭鉱について次のように記録しています。「日本軍は敗戦までの八年間で石炭千四百万トンを略奪し、六万人余の中国人労工を死亡させ、二十力所の万人坑と死体焼却場が残された」と。

二、炭鉱労働者として

● 地元の炭鉱に就職

炭鉱探しはともかく、中国兵刺殺という、恐らく同世代では誰も経験できない、またすべきでもない稀有な体験をひっさげ帰国した十四歳の私は、このあと、同級生から遅れること二年、花札は依然続けながらも、迷わず就職の道を選びました。というのは、当時、この大加勢から

中学校など上の学校へ進むのは六十人中わずか一人、働くのが当たり前だった上に、国のため兵隊になれる徴兵年齢(満十歳)にはまだ遠く、何より私自身、両親の影響もあって、勉強よりも働くことが実際に好きだったからでした。

そんなわけで、尋常小学校時代の先生の推薦もあって就職できたのは、地元大加勢地区にある日鉄鉱業の炭鉱でした。ここで私は終戦を挟んで昭和十八(一九五三)年までの十年間、いわば思春期から青春期を捧げて働いたのです。

ちなみに同社は日本製鉄株式会社(日鉄)の系列下にありましたが、日鉄は官営の八幡製鉄所を中心に、官営と民営の製鉄事業者が合同して昭和九(一九三四)年に設立された半官半民の国策会社で、戦後の昭和十五(一九五〇)年に財閥解体のあおりで消滅。現在の新日鉄住金などの前身にあたります。

● 過酷な掘削作業に

私が就いたのは、そうした炭鉱労働の中でも最も過酷な「掘削」でした。

地中のかかなり深い所に造られた、やや広い空洞までは坑内列車に乗って進み、そこから蟻

巢のように色んな方向へ、それも水平とは限らず、やや上向きや、やや下向きにも伸びた坑道を、二人ずつの三十組ほどがいつせいに掘り進むのです。坑道の直径は七十センチ。禪一丁の体を横向きや腹這いに寝かせ、柱や天井に取り付けたカンテラの灯りを頼りに、前面の石炭壁を、その硬度や鉱質に応じて五種類ほどの刃先を取り換えながら、シルハシで崩し、それがある程度たまると、スコップへ角度の小さいもので後の相方へかき送ります。相方には男性もいれば女性もいて、やはり上半身は裸。彼らは掘り手から送られた石炭をスコップで木箱へ放り込み、それを広い空洞まで押し運び、そこに停まっている大きなトロロッコへぶちまけるのです。

そして、そのトロロッコを地上まで押し上げるのが中国や朝鮮の労働者でした。つまり、日本その他の炭鉱と同じように、この炭鉱でも、大陸や半島から連れて来られた人たちが一緒に働いていたのです。が、「強制」とは言つものの、実際に彼らが従事していた仕事はトロロッコを押すなどの簡単な作業で、本当に苦しく、また技

←明治期の炭鉱労働を描いた山本作兵衛氏の絵画。鹿町の炭鉱も戦前までは似た状況だった



術を要する仕事は私たち日本人が担いました。ともあれ、こんな労働を私たちは、トロロッコが何台も停車する広い空洞での昼食や休憩を挟んで、一日十二時間も続けたのでした。

● 楽しみだった佐世保の街

そんな過酷な炭鉱労働の中で月一回ほど、佐世保市へ遊びに出かけるのは大きな楽しみでした。佐世保は軍港の街でしたが、周囲を炭鉱に囲まれていたため、炭鉱町から遊びに来る人が多く、そんな人たちは格好や雰囲気ですべ分かるので、佐世保市民は彼らを「炭鉱人」と呼んでいました。その佐世保で私たちは、玉屋というパートで買い物をしたり、映画館で映画を観たりしました。

話を少しさかのぼると、子供の頃にも佐世保には家族でよく遊びに出かけたものですが、その頃のことでも覚えているのは、映画館では皆が座布団に正座して鑑賞したこと、百貨店では父がマネキンに向かって真面目にあいさつしていたことです。

が、そんな佐世保の街も、戦争末期の昭和二十(一九四五年)には四月、五月、六月と二度もB29の空襲に見舞われ、中でも六月二十八日深夜から二十九日未明にかけての大空襲では、市民千一百人が犠牲になりました。

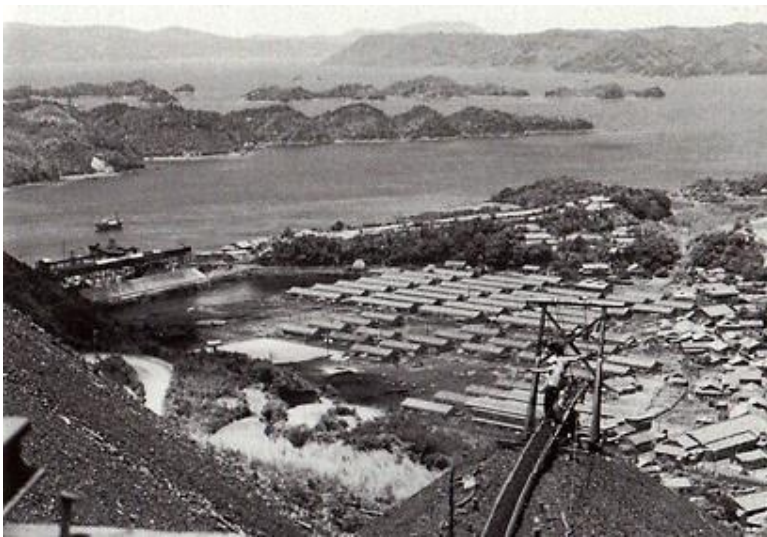
● 終戦で心機一転

やがて昭和十（一九四五）年八月。六日には広島市へ、九日には長崎市へ原爆が投下されたことが、「ヒカドーン」という言葉と共に伝わってきました。この時、同じ長崎県内でも八十キロ以上離れているので、長崎市への原爆投下には全く気が付きませんでした。

そしてついに日本がポツダム宣言を受諾して連合国に無条件降伏すると、戦勝国となった中国や朝鮮の労働者はそれまでの従順な態度を一変させ、炭鉱から引き揚げて帰国したり、残った者は朝鮮人連盟などを結成して、強制労働の補償や労働者としての権利を求めたりするようになりました。それで、それまで仲良く仕事していた私たち日本人との仲もおかしくなり、時には喧嘩になることもありました。

一方、このとき多感な十六歳の私は、小学時代の軍国教育の影響や、中国滞在中、兵隊さんから親切にしてもらった経験も思い出し、これからは悔しい思いをし、家族や仕事仲間と一緒に泣いて暮れる日が続きました。しかし一方では、空襲の恐怖がなくなったこと、それ

に、それまでの軍国的な空気を統制経済の重苦しさから解放されたことにホッとする気持ちもあり、日本の復興のため、これまで以上にこの炭鉱労働に力を注ぐことと気持ちを切り替えてい



→ボタ山から見た戦後の日鉄炭業所鹿町炭鉱（北松浦郡鹿町歌ヶ浦）。大加勢川河口に積み込み港があり、炭鉱住宅がひしめいていた

きました。

●炭鉱近代化、鹿町も発展

そんな私の気持ちに呼応するかのよう、この終戦を機に、全国で炭鉱労働の近代化が図られ、坑内作業では上半身裸は「法度」、半袖・半ズボンの作業服にヘルメット着用が義務付けられ、ヘルメットに取り付けたランプがカンテラの代わりを、回転する小さなベルトコンベアが相手の代わりをしてくれるようになりました。

その一方で、昭和二十（一九四五）年五月三日には天皇主権から国民主権への移行を謳った日本国憲法が施行。同時に改正町村制も施行され、同年十月一日、鹿町村は「鹿町町」と名を変えました。同日、二十八日に歌ヶ浦小学校で開かれた祝賀会には多くの住民が参加し、将来の発展を祈ったものでした。

ちなみに、当時の鹿町の戸数は約三千三百七十人、人口は二万七千二百と戦前戦中より大幅に増加。日鉄炭業、野上東亜炭業、井華炭業、麓炭業などが経営する幾つもの炭鉱が掘り出す年二十八万トンの強粘結炭を中心に、年間生産高は約七千万円。それに伴って商工業や交通

「戦後の日鉄鹿町炭鉱には多くの炭鉱マンと家族が移住し、最盛期には鉱員数三千を数えた



運輸も発展し、いわゆる炭都としての将来を期待される町となっていました。

● ギャンブルに捧げた青春

そんな、いわば明るい時代を背景に、炭鉱労働の傍ら、というよりそれ以上に私が力を注いだのが、ほかでもないギャンブルでした。子供の頃から馴染んだ花札はもとより、政府の戦後復興策の一環として急速に盛んになった競馬(昭和二十一年再開、競輪(昭和二十三年初開催、競艇(昭和二十七年初開催)などの公営ギャンブルに、私は十代終わりから二十代初めの青春を惜しげもなく捧げたのでした。そして幸か不幸か、元来、勘のいい私はこの面でも

他の者を尻目に安定した実入りがあり、以後今に至るまで、その醍醐味から抜けることができなくなつたのでした。

● 井論大会で優勝も

とはいえ、その一方で私がけっこう嵌つてしまったのが、そんな賭け事とは対極の位置にあるともいえる井論でした。それは小学校時代からの友だちであつた松永馨に誘われたのがきっかけでした。彼は小学校時分にはいつも私を誘つて登校し、下校時にも必ず私の家に寄つてから帰宅するほど仲が良かったのですが、私と違つてとても勉強ができ、大加瀬からただ一人上の学校へ進み、東京の駒場大学を卒業して帰郷し、地元で教職に就いていました。そして戦後民主主義の高揚の中で「大ブーム」となつた弁論にも関心を示し、「雄弁連盟会」なるサークルを自ら立ち上げ、そこへの入会を私にも薦めたのでした。会員には彼のような教育者が目立ち、女性教師も三人ほど在籍していました。頭の回転は良い方だと自認していた私ですが、ほかでもない幼友たちからの誘いに一も二もなく応じ、先輩たちに弁論術を教わっていくつ

ちに、自分でも驚くほど、その面白さ、というか、快感に嵌つていきました。めきめきと腕を上げ、入会から二年ほどで会の幹事に推され、さらには西九州の精鋭が一堂に会して開かれる大会にも、サークルを代表して出場するようになったのです。

そしてその大会出場が二度目となつた、たしか昭和二十八年(一九五三年)の秋、なんと優勝を果たしたのです。論題は「暴力について」。

——力の行使は人間の本能であり、感情の発露であり、永遠になくならない。それを暴力という名で、また戦争につながるからと

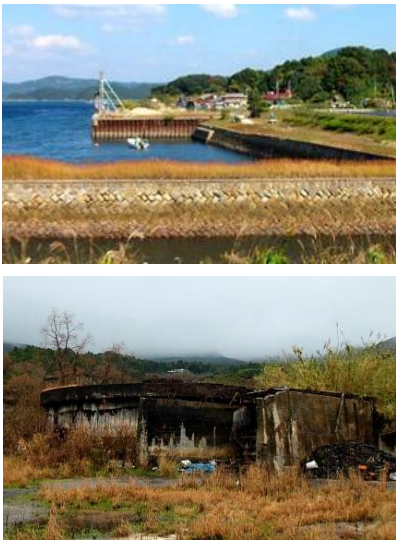


→戦後の鹿町風景。上は信者が多かったカトリックの「大加瀬教会」、下は多くの住民でにぎわった映画館「加勢会館」

いの理由で、一律に否定するのは大きな間違いである。大切なことは、人々を自分の下に屈服させるためにそれを無暗^{むやみ}にふりかざすのではなく、人々の幸福につながる目的のために節度^{せつど}と自制をもって用いることである――。

こんな展開で、大勢の聴衆を前に、落ち着いて、身振りも交えて力強く語り、終わった途端^{とたん}に沸き起った盛大な拍手に確かな手応えを感じたことを、昨日のことのように覚えています。そしてこれが、結果的には二年間の弁論生活の最後を飾る二世二代の快挙^{こうきょ}となったのでした。

● 合理化の中、希望退職



→にぎわった積み込み港の現在の様子①と、今は廃墟となったかつての坑道入口付近②

ところが、そういつているうちに、アメリカの指図^{さしず}によって、日本の国策であった石炭増産にブレーキがかかり、日本の工業エネルギーの主役は石油に移り始め、福岡県の三井三池など全国^{みづいみいせ}の炭鉱では、閉山や合理化に抗議して大規模な労働争議^{ろうどうそうぎ}が起っていました。この鹿町村の各炭鉱もその例外ではなかった上に、坑道を深く掘り進むにつれて石炭の質が低下してボタが増え、採算がとれなくなるといふ事情も加わり、希望退職^{のぞみたいさく}を募る^{もつ}なとして徐々に人減らしを進めていきました。最終的に閉山に至ったのは昭和三十八（一九六三）年春でしたが、私が何



→港の近くに今も公営住宅として残る炭鉱住宅①と、かつての鉱業所跡に建つ歌浦小学校②

人もの仲間と共に炭鉱を去ったのは昭和二十八（一九五三）年の春でした。

希望退職に応じたので、多少の退職金は出ました。しかし苛酷^{さいく}で高度な技術を要する特殊な仕事だっただけに、いわゆるつぶしが効きません。それでもみんなは生きるため、仕方なく親戚^{しんせき}や知人を頼って就職口を探り、それぞれの新しい道を進んでいったようでした。

三、大阪・港区で港湾労働

● 競馬場から大阪へ

時代の流れとはいえ、生涯の仕事とも心に決めて力を注いでいた炭鉱労働を取り上げられた二十四歳の私は、同年十一月大阪へ出ました。それは次のような事情からでした。

その年、坑夫としての仕事がなくなり、何とか次の仕事を見つけないと焦りながらも、地元ではこれといった職にもありつけず、弁論サークルからも自然と足が遠のき、子供時代からなじんだ花札賭博^{はなは}などで一日二日を過ごしていた私は、秋も深まったある日、時間をつぶすために立ち寄った福岡県小倉^{こくら}の競馬場で、一人

の男に出会ったのです。何となく気が合い、とりとめないことをあれこれ喋り合っているうちに、その四十歳ぐらいの男は大阪の人間であり、これから大阪へ帰ると言ふだということを知りました。それまで九州から出ることを考えたこともなかった私ですが、急に「そうか、大都会の大阪へ出たら何とかなるかもしれない」と閃くものがあり、この男に付いて行ってみようかと決めました。人の好きそうな彼は、私の申し出にちよつと戸惑いながらも「そら構わんけど…」とあつさり同行を認めてくれました。

そしてその晩、家族に連絡もせず、家から出たままの恰好で、私はその男と一緒に国鉄小倉駅から夜行列車に乗ったのです。所持金がほとんどなかった私はもちろんキセル乗車。十円で入場切符を買い、それで行けるところまで行くと思つたのです。

蒸気機関車の牽引でうめうめ鳴る二等列車の中、裸一貫で都会へ出る不安はもちろんありましたが、それよりも、新しい地で待つ仕事への期待、それに、その頃なぜか負け続けた賭博の借金で迷惑をかけつつあつた家族の縛りか

ら放たれる爽快感が勝つた心持ちで、眠りこける男の向うの窓外に流れる灯を眺めながら、私の体は硬い座席の上でも心地よく揺れていた。

● 梅田から中崎町へ

汽車は翌朝、瀬戸内海沿いのどこかの駅で終着となり、そこから先は行きずりのトラックに乗せてもらうことにしました。大阪の男も付き合い良く一緒に乗ってくれました。そして何台かのトラックを乗り継ぎ、途中、加古川から神戸までは警察官に泣きついて国鉄の乗車賃を出してもらつたりしながら、たしか小倉を出発して二日目の午後、ようやく大阪に到着しました。駅前の広場に降り立った私は、当然その男が何かの職を世話するため、一緒に歩いてくれるものと信じていました。が、「ちよつと待ってな」と入った公衆便所から出てきた時、その男の姿はありませんでした。

「ほられたな…。いきなり想定外の展開となり、これからこの大都会のどこをどう動いたらよいのか、それまで長崎周辺から出たこともない自分にはまるで見当が付きませんでした。

←長崎から出てきた昭和二十年後半の国鉄大阪駅前。駅前から市電（チンチン電車）が走り、周辺にはまだ闇市が残っていた



茫然としながら、この頃には闇市こそ大半はなくなつていたものの、様々な露店が立ち並び、人々が忙しく行き交う梅田界隈を、当てもなく歩いていると、その中に、龍を背負い、頬かむ

りをしたバタヤの姿が目にとまりました。この大都会で貧しくもたくましく生き抜いている姿に何となく親しみを感じ、彼なら何かが手がかかることになることを教えてくれるかもしれないと、臆にもすぎる思いで声を掛けました。

「おじさん、なんか仕事なかと?」

「仕事? そやな、天六へ行ったらどうや。」

工場がぎょうさんあるわ」

「天六で?」

「天六も知らんのか。そつか、長崎から出てきたばかりか。天六はな、この電車道に沿ってまっすぐ歩いて行ったらええんや。」

言われた通りに、市電が走る道をしばらく歩いて行くと、「中崎町」停車場があり、そのそばに、通りに面して幾つかの町工場が見えまいた。「これが大阪の工場か。ここで働かせてもらえるかもしれない」そう期待して、ある工場の前を行ったり来たりしながら、ガラス戸越しに、いきりに中をのぞき込みました。仕事はもう終わったゆえに工員がいない人の姿は見えませんでした。師走の日は短く、すっかり暗くなった空気の中心で、朝から何も食べていなかった私の体は冷えて

切っていました。

● 工場主の親切

「なんやお前」

見知らぬ若い男が何度も中をつかっていることに気付いて、やや不審な顔つきをしながら出てきたのは、メガネをかけ、背は低いがつりした、五十がらみの男性。この工場の経営者のようでした。

「は、はい。し、仕事を探しています」

「仕事? そつか、まあ入れ」

情の深さうなその社長が招き入れてくれたのは、旋盤などの機械類がひしめく教室くらいの広さの作業場の真ん中でした。達磨ストーブが据えられ、まだ火が残っていました。その前で、溶接作業に使うような、竹組みに筵をかためた低い小さな椅子に社長と並んで腰かけさせてもらい、ストーブの火に手をかざしながら、私は大阪へ出てきたいきさつを話しました。

「そら困ったことやなあ…」と同情しながらも、その社長は、今のところ人手は足りているので雇うわけにもいかなない事情を申し訳なそうに話しました。そこへ、その夫人らしい、

やはり五十がらみの女性が奥の部屋から降りて来て、「まあ、これでも食べて元氣出さないな」と焼き餅を二つほど、皿に載せて出してくれました。

「うー、ちゃんばつしてもうて。あ、ありがとうございます。いただきます」

何度も頭をさげ、私はそれをふうふう吹きながら食べました。冷たいと聞かされていた都会人の意外な温かさ、お腹と同時に胸も熱くなっているのが分かりました。

そつこつしているうちに、夜回りのパトカーが工場の前に停まり、巡査が一人降りて、ガラス戸を開けて中をのぞき込みました。

「変わりありませんか。……うん? 誰や、その男は」

エンジンを切って入って来たのは四十になるかならないくらい歳の巡査でした。社長が事情を話すと、「そつか、ワシも長崎や」と急に親しげな顔つきになり、立ってストーブに手をかざしたまま、私の仕事を真剣に聞いてくれました。そして、自信めげに「アドバイスしてくれたのです。」

● 大阪港に仕事なく

ところが翌朝、まだ暗いうちに起こしてもら

しかし、降り立った「築港棧橋」駅の周辺に、

● おばあさんの親切

「おばさん、持ちちやるか？」

「はい、はい」

● 井本組で働き始める

この大阪港は、戦前・戦中は多くの兵士や物

12

を扱う全国有数の港に発展していました。しかし水深が浅いため、荷揚げには通りの方法がとられました。

まず三千五百トン以上の大型船は接岸できないので、沖合に停泊してきつひ、そこで貨物を分散して舁へ降ろし、その舁が岸壁との間を何度も往復して荷揚げを完了する。いわゆる沖取りという方式をとり、これは主に大港や阪神港運などの荷役会社が担っていました。一方三千五百トン以下の中・小型船の荷物は直接埠頭で荷揚げされ、こちらは間口組や上組が受け持っていました。また沖取りと埠頭揚げとを問わず、石灰はもっぱら鵜池組が扱っていました。

そして、こうした荷役会社の下請け人夫として井本組などが派遣され、使われたのが私たち沖仲士で、沖取りの場合は「通船」と呼ばれる小さな船で本船まで運ばれて、そこで荷物を舁へ担ぎ降ろし、一方の埠頭揚げの場合は甲板の上で荷物をモッコ（縄を網のように編んで四隅に縄を付けた運搬用具）に入れ、その後に通した木の棒を二人一組で担ぎ、甲板から埠頭へ斜めに架けた細長い板を伝って運び降ろし

←私が港区を離れる少し前、昭和三十年代半ばの大阪港の埠頭での荷揚げ風景



ました。炭坑での掘削ほど危険で苛酷ではありませんが、自らの体が資本の、また寒暖の厳しさをともに受ける、なかなか大変な肉体労働でした。

荷物には砂糖や綿化や肥料など原料ものが多く、それらの中で特に皆が嫌ったのが、強烈な臭いを発する革類の運搬でした。特になめす前の牛革などの臭いは、作業後に入浴したあとまで体に染み付いているように感じられたものでした。

● ヤクザの仕事が忙しく

ところで井本組はその名が示すように、ヤクザの事務所であ、あのおばあさんは、いわば女親分でした。一階は賭場になっていて、夜になると博打が開かれました。そのため当然、仲間たちの喧嘩はもちろん、よその組とのいざいざもしょっちゅうのようでした。この昭和二十年代、商圏の割り振りを含む大阪の町の治安のかなりの部分は、こうしたヤクザが担っており、港区ではこの井本組などが大きな力を持っていたのでした。

そんな環境のせいもあり、また子供時分から博打好きの血も手伝い、三カ月もすると、私は女親分の指示もあって、沖仲士よりも、そちらの仕事、つまり博打場の仕切りや他の組とのやり取りの方が忙しくなりました。

「フタ箱に放り込まれた若い衆を引き取りに行
く」ともよくあり、そんな時には前もって女親
分から言われていたように、警察の手前、その
若い衆のほつぺたを張り、「兄貴の顔をつぶすよ
うな」と一度とすんなよ、「なごだいなめ
たものでした。警察も慣れたもの」「また来やが
った」という顔をしながらも、すぐにその若い
衆を出してくれました。

● 白神幸四郎の存在

また、この井本組を通じて、港区の和田組、
田中組、大野組や、西区の宮崎組、さらに白神
幸四郎という有名な流れ者と知り合ったのも、
この頃でした。

白神とは、井本組で開かれた博打の会場で、
井本の若い衆と彼が何かのことで揉めた時に初
めて顔を合わせました。すでに井本では「リーダ
ー格だった私が間に入ると、彼は「なんやお
前、サシで話をつけよかないか」と凄めました。
応じた私は彼と肩を並べて外へ出、近くの船員
倉庫へ入り、中から鍵をかけました。そうして
立ったまま眠みぬこと十数分。白神は言いま
した。

「大したやつちゃ。これからはあんじようや
つていじやないか」

以後、彼とは妙に馬が合い、私が港区を離れ
るまで、立場を超えて何かと助け合つ中になっ
たのでした。彼は私より二、三歳上で、細面の
顔に目付きが鷹のように鋭く、小柄だが驚くほ
ど敏捷で、太腿には髑髏の入れ墨をしていま
した。

その白神はまた、梅崎、中島といつ他のヤク
ザ二人と義兄弟の盃を交わしていましたが、
そのうち梅崎はヤクザに似合わない色田の大変な
美男子で、その美しい陶器のような背中一面に
見事な桜の彫物をしていました。銭湯で感心し
ながら眺めていた男の子に、私が「絵具で桜の
絵を何べんも描いとったら落ちたようになつて
しもたんや」と冗談に言つた。「ほんま…」と真
に受けて怖がつていたのを覚えています。

四、近畿各地で建設労働

● 港区離れ、現場仕事で食いつなぐ

いつして私は港区で港労働者（沖仲士）と
して、次いで博徒（ヤクザ）として数年の月日

を過ごしたのですが、たしか二十八、九歳（昭
和三十二、三年）の頃、博打場で大きな諍い
があつて暴力沙汰になり、その場を仕切つてい
た私は責任者として警察の追及を受ける羽目に
なりました。そうして井本親分や白神らの勧め
もあつて、やむなく港区を離れることになった
のです。また折悪しく、このころ故郷の父が七
十歳で他界したこの訃報が風の便りに届きまし
たが、失踪同然に故郷を捨てた身に、もはや帰
郷の道はありませんでした。

その後、いわゆるお尋ね者となった三十代の
私は、警察の目から追われるように、大阪市内
はもとより、守口や門真、奈良や京都や兵庫、
遠くは滋賀、和歌山、福井、三重、岡山など、
近畿一田の飯場やアパートを転々としながら、
様々な現場仕事で食いつなぐ生活を送ることに
なります。が、これはこれで、それまでのヤク
ザな人生を一変させ、それなりに、つまり仕事
の幅を広げるという意味で、得ものころもある
経験となりました。

そんな中でも罵職にはかなりの間、携わつ
ていましたが、そのうち軽量罵としては木の

あしは じょうちゆうひん

足場組みを、重量高^{じょうちゆうひん}としては鉄骨の足場組みを手掛け、ある現場では「アサガオ」という高度な技術を要する足場を組み上げました。また、やはり意をしていた頃、ある建設現場で、父譲りの親分肌の血が騒いだのか、大工や左官^{さかん}や鍛冶屋^{かじや}など各持ち場の職人が連携して仕事を進めなければならぬにもかかわらず、逆にトナブルや事故が絶えない作業の進め方に疑問を感じ、職人連^{れん}を代表して、「こんなやり方はおかしいやないか」「この改善すべきやろ」と大手建設会社の現場監督^{しやんとく}に進言^{しんげん}したこともありました。このほか、玉掛^{たまかけ}、重機グリーン、ガス溶接、火薬^{たけ}などでは講習を受け、国家試験に合格し、技能資格を幾つも取得しました。

「このように私は、どんな仕事もすべて人並み以上^{いじょう}にマスターし、仕事仲間や上司からはよく「長年やってる者^{もの}より、途中から入った者の方がうまいやないか」な感じでされたものですが、それは、まず理屈^{りくつ}（理論）から入って基本を我が物とし、それを実践の中で自分なりの工夫^{くわふ}で磨^{みが}いてくべ、とこの方法を、どんな場でも無意識^{みじしき}のうちに採^とっていたからだと思います。

● 仕事はなれ、生活困窮

ところが、全国各地の建設現場を渡り歩くそうした生活が数年続いて、やがて警察の追及も時効で消滅し、たしか、福井県かどこかの発電所の建設現場での飯場^{はんば}暮らしを終えた頃、三代半^{なな}ばの私は、そんな生活にも飽きと疲れを覚え、何より「こんなことの繰り返しに意味があるのか」と虚しさを感じてはつになりました。そして、相変わらず競艇や競輪などの公営ギャンブル^{かんぷる}通いは続けながら、徐々に仕事には就かなくなり、また過去のいきさつから、港区や、まして長崎へ帰る選択も既に断^たっていた私は、次第に生活に困窮し、その日の食べ物にも事欠くようになったのです。

● 義侠心は相変わらず、女と同棲も

その一方で、アルコールはほとんどやらないものの、寂しがりの屋でもある私は、話し相手を求めてスナックやバーには欠かせないの財布をはたいて頻繁^{ひんぱん}に通ったものでしたが、京橋^{きやうきし}だったか十三^{じゅうさん}だったか、どこかのアルサロへ遊びに行った時など、客の衣服に飲み物をこぼして「なだちゅうつとしてくれるやー」と謝罪を

求められ、マネジャーと一緒に十下座^{じゅうさざ}しているにもかかわらず、なお執拗^{しつてつ}に「そんなことを済むと思ってるのか。裸になれ」などといった言われているホステスを見兼ね^{みかね}、「あんまりなことしたらアカンぞ。堪忍^{かんにん}してやれや」のひと声でその場をおさめるなど、生来の義侠心^{ぎぎやくしん}、というか世話焼きの性分^{せうぶん}を、相変わらず抑えられずにもいました。

また、私のどろが気に入ったのか、スナックなどで知り合った何人かの女性が私のアパートへ入れ代わり立ち代わり押しかけ、しばらく同棲^{どうしき}しては離れる、といったことを繰り返したのも、この頃でした。

● 狩り込みで五十嵐館長に出会う

そんなある日、ふらりと出た梅田で、私は自ら誘い込まれるように「狩り込み」にかかったのです。狩り込みとは、この昭和三十年代終わりのころ、戦後混乱の名残り^{なごり}でまだ完全には根絶されていなかった都市浮浪者^{うろうろうしや}の摘発・救済活動でした。そしてこのとき私を狩り込んだのは、国鉄大阪駅ガード下にあった「梅田更生館^{うめだこうせいがん}」の五十嵐兼次館長^{いかりけんじ}でした。同館は、労働意欲をな

くしたり、病気や障害や高齢で働けなくなった
りした人たちが自立できるよう、共同生活の中
で様々な支援を講じる更生施設で、大阪市が運
営していました。梅田周辺でこの狩り込みが行
なわれていることを噂に聞いていた私は、わ
ざと目につくようについで、白昼、繁華街の路上にし
やがみ込んでばやりしていたのです。

当時六十過ぎで、中背のがっちりした体つ
きに眼鏡をかけ、作業服のような厚手の制服を
着た五十嵐館長は、そんな私に「兄ちゃん、何
してるんや」と優げに声をかけ、「よかつたら
ちよっと話せえへんかと肩に手をかけながら
一緒に十分ほど歩いて、ガード下の建物に入り
ました。数人の職員風の男女が机でヘンを走り
せたり受話器を耳に当てたりしていました。多
分この入居者と思われる、元浮浪者のような
雲田気の男が一人、奥の部屋から現われ、虚ろ
な表情で私に目をやりながら外へ出て行きまし
た。館長はその部屋の隅のソファに、テーブル
を挟んで私と向き合い、頭上に響く電車の轟音
を気にもかけない様子で、私かなぜばやりし
ていたのか、それまでどんな生活をしていたの

か、メモを取りながら聴いてくれました。

「そう、困ったことやなあ」

真剣な中にも穏やかな笑みを浮かべ、何度も
相槌を打っていた館長は、やがて私の話が今後
の生活不安に及ぶと、待ってましたばかり、
私の顔をまともに見つめて、「うう言いました。

「落ち着くまでしばらく、あんだとおんなじ
ような事情を抱えた人らと一緒に過ごさんか」
もとより、そのことが目的だった私は、少し
戸惑ったような、また観念したような表情を見
せながらも、「こつくりと頷きました。

● 淀川寮から入院、そして自瀧館へ

数日後、私は五十嵐館長の勧めに従って、東
淀川区・鳥飼大橋のそばに建つ更生館の支所
「淀川寮」に入所しました。この間に守口のア
パートを引き払い、わずかな所持品を紙袋に詰
め込んで再び更生館を訪ね、同館の職員が運転
する車で淀川寮へ向かったのです。たしか三十
五歳だった昭和二十九（一九六四）年春でした。
ちなみに、五十嵐館長はこの翌年（昭和四十
年の春、六十五歳で大阪市を退職されたといっ
た）で、終戦直後からこの地で二十一年間にわた

って浮浪児・浮浪者の救済事業に力を尽くされ
た同館長の、いつてみれば「最後の狩り込み」
に私は引つかかったのです。

ともあれ、この淀川寮では、それぞれの事情
を抱えた約五十人の入居者と一緒に、衣食住の
心配なく共同生活を始めることができました。

ところが、この穏やかな寮生活での気の緩みが、
それまでの肉体労働の中での無理や、仲間への
過度の気づかいを一気に表面化させたのか、入
所後一カ月ほどして、頭部に強烈な痛みが走り、
足先が動かなくなるという症状に見舞われたの
です。心配した寮の勧めで、当時まだ「医学研
究所」の看板がかかり、廊下が板張りだった北
区の北野病院へ緊急入院。診断の結果、「神経系
統の腫瘍」と判明、すぐに阿倍野区の大阪市大
病院へ移され、手術を受けました。

幸い手術は成功し、以後、そこで住民登録し
たりしながら数年間、長い入院生活を送ること
になります。やがて、ほぼ全快を見た昭和四十
六（一九七二）年十二月、淀川寮からの紹介で、
西成区天下茶屋二丁目（当時）に今もある「大阪
自瀧館」に移りました。同館もやはり淀川寮と

同じ自立支援施設でしたが、大阪市の所管ではなく、創立者の中村三徳氏と、同氏を引き継いだ吉村敏男氏らによって、明治末期から大阪府内で、港湾労働者や生活困窮者の宿泊・救護・職業紹介・自立支援などの活動を続けてきた社会福祉法人が運営していました。

五、自強館で奉仕活動

● 自強館で生活改善運動スタート

さて、この大阪自強館でも、淀川寮と同じく、様々な障害や困難を抱えた人たちと一緒に、何



→大阪自強館の創立者・中村三徳氏(左)と、中村氏を引き継いで発展させた吉村敏男氏(右)

不自由ない毎を送りました。ひと部屋には二段ベッドが四台あり、八人が起居。毎日そこで内職をしたり、作業場で共同作業をしたりして貯金を少しずつ増やしなが、自立の日に備えるのです。

そうした穏やかな日々を重ねるうちに、私の中にはまたもや世話好きの血が騒ぎ始めました。「確かにこんなこの暮らしは穏やかじゃけん、何かが足りんばい」

「生きる目的や楽しみは見つけられるよう、何でできんもんじゃるか」

そんな気持ちが頭をもたげてきたのです。

そうして、たしか入所から数年後のある日、

また四十代で、初代・吉村敏男氏から理事長のバトンを引き継いだばかりの吉村幹生館長に相談したのです。当時、同館長はいわば雲の上の存在で、入所者だけでなく職員でさえも簡単に顔を合わせることはできませんでした。が、誰にも物おじしない性格の私には、館長の方からも不思議と心を開いてくれ、それまでも色々な会話を交わしたことがありましたが、この時も真剣な態度で相談に乗ってくれたのです。

←大阪自強館の入所者の作業風景(上)と、平成十三年の創立百周年感謝の集いの様子(下)



館長室で、恰幅のいい体をソファに預けながら、私の訴えに耳を傾けていた館長は、しばらく考え込んだ末に言いました。

「みんなの生活にええ刺激を与えするため、文化活動をやらうとやるか」

「ぶ、文化活動？」

「そや、生活と仕事の合間に、自分の好きなことを、好きなもんどうして一緒にやるんや。まあゆつたらサークル活動やな」

「サークル…」

「好きなことを一緒にやるのは誰でも楽しいもんや。毎日の生活にリズムと張りができる。」

皆の間につながり、つまり仲間意識が生まれる。内職にも力が入る、退館後の人生への弾みにもなる」

「なるほど。さすが館長。さっそくやりましょー!」。

「いつして我が意を得た私は、館長の指示を受けた職員さんたちの助けを得、また入居者の中から何人かの協力者を募ったりもしながら、いよいよ入所者の生活改善運動を始めたのです。」

● サークルを組織、文化イベントを開催

まず手掛けたのは同好会つくりでした。幸い

入居者の中には、旅役者や流しの演歌師など、それまでの人生で身に着けた様々な技術や趣味を持つ人がおり、その人たちを中心に、音楽、陶芸、将棋、囲碁、書道、ペン習字、絵画、カラオケなどのサークルを組織したのです。また殺風景な寮の庭には、私を言わずに建設職人が中心になって、花壇を造成したりしました。

中でも我々が大きなエネルギーを注いだのが、演芸会などの文化イベントでした。そのうち音楽「コンサートでは屋上に紅白の幕を張り、テントを設営し、その中で、入所者自身や、職員が

「大阪自彊館では入所者のために度々演芸会が催された。写真はいずれも昭和五十年代。上は上方柳太・若井けんじ、下は若手漫才コンビ



外部から呼んでくれた歌手やミュージシャンに歌唱や演奏を披露してもらいました。盆踊りでは中庭の真ん中に櫓を組み、べるりに提灯を飾って雰囲気を出しました。

● 近隣との交流へ食券方式

そのうち同館最大のイベントである創立記念祭も、我々入所者が手掛けることとなりました。これには特に近隣との交流が重視されました。というのは、周辺住民の間では、昭和干七（一九五〇）年五月に更生施設「自彊館」として正式認可を受けて以来のこの館について

「刑務所帰りが多い」などの噂が定着し、入所者との関わりは敬遠されていたからでした。

そこで「入所者の自立と社会復帰」「地域に根差した社会福祉法人」を掲げる施設である以上、「これではあかん」と考えた吉村理事長以下職員の後押しを受け、私たちは額を集めて運営方法を考えたのです。

「お好み焼きやたこ焼きの屋台を出したらどうやる。子供らが喜ぶで」

「どうええな。けど、どうやって食へてもらうんや?」

「うーん…そやな…」

などと知恵を絞って編み出したのが、金券方式でした。一枚百円の金券（ワーパーン卷）を十〜十五枚綴ったものを近所の町会長に何セットも渡して各家庭へ配ってもらい、もちろん実際の料金負担は館が持つという事で、それを住民に使うつもりなのです。館長の賛同を得た私たちはさっそく屋台つくりや材料調達、調理や販売などの分担を決め、自分たちには難しいチラシや金券の制作、BGM放送には職員の力を借りました。そして、これは大当たりでした。

当日、中庭にひめくように立ち並んだお好み焼き、たけ焼き、焼き鳥、焼きそばなどの飲食屋、それに「コーダー」釣りや当りものなどの遊び店をめぐりて大勢の住民が押し寄せ、身動きもとれないほど。子供たちがはしゃぎ回り、親子が語り合い、老夫婦が肩を寄せ合った姿が館内のいたる所に見られました。

● 大きな満足と達成感

やがて、この運営方式が定着するにつれて参加者が増え続け、館内だけでは手狭になってきました。そこで数年後には近隣町会の協力も得て、近くの今宮小学校の校庭を借りることができ、そこを会場に、さらに大規模な創立イベントが、住民を巻き込んで開催されることになったのです。我々はもちろん、職員も大きな満足と達成感を味わい、とりわけ吉村理事長の喜びは大きな宝ものでした。

「じいまでやっつけねえとは思わなかった。

渡部君、おおきにー」

「いや、みんな館長の熱意のたまものですわ。

我々はそれに乗っただけですから」

「いやいや。何と言ってもあんなの人の柄や。」

職員だけではじいまで皆を動かすことは出来なかったやろ。ほんまにありがつい」

こんな会話を交わしたのは、小学校での何度目かの創立祭を終えた夜。あの入所者の生活改善運動を始めるきっかけとなった相談をしてからほぼ十年の歳月が流れた昭和六十一（一九八五）年の初夏、同じ館長室でのことでした。

● 私の言いつことは聞いてくれた

実際こつした活動の中でうれしかったのは、仲間の誰もがみな私の言いつことをよく聞いてくれ、よく動いてくれたことでした。職員には逆らうことがあっても、私の指示や提案に逆らうことはほとんどありませんでした。これにはやはり、父親から譲り受けた世話好きの気性、それに様々な現場仕事の中で培われた、いわば問題調整力や人心掌握術が、無意識のうちに働いていたのだらうと振り返っています。

ちなみにこの頃、右翼の大物・笹川良一氏が競艇事業の収益で、琵琶湖のほとり（たしか今津あたり）に保養施設を建てて大阪自彊館に寄贈してくれたのですが、そこへ我々入所者が何かと理由を付けては繰り返し泊りに行くう

ち、寮の二つのようになっていました、ということもありました。

ともあれ、そうして大阪自彊館を舞台に、以前の生きる目的を見失ったかのような生活から一転、自分の居場所を得たかのように前向きな生き方をしてきた私も、やがて初老と言われる年齢に差し掛かっていました。

六、穏やかな老後の生活

● 寮を卒業、老人ホームへ

そうして時代が平成に変わる少し前、たしか昭和六十三（一九八八）年春、この間の内職や作業で得た生活資金も自立できるほどに貯まり、還暦を前に一定の年金ももらえる目途がついた私は、お世話になった館長や職員さんたちの激励と見送りを受けて、大阪自彊館をめでたく卒業する日がきました。そして平野区瓜破のアパートで十四年ほど、競艇などの公営ギャンブルもほどほどに楽しみながら、気ままな一人暮らしを満喫したのです。

やがて七十三歳になった平成十四（二〇〇一）年の春、枚方市星ヶ丘の老人ホームに入居。こ

（この終の棲家とする算段でいました。ところが一年後、炊きそでないのご飯を出されたことがきっかけでこのホームを去ることになりました。わざとではないとはいえ、プロとして恥ずかしい仕事をしながら二言も謝罪の言葉のない調理職員の態度に、またまた子供時代からの血の気がたぎり、「なぜ、皆にすみませんの一言が言えんのか」と怒鳴ったのです。それで何となく浮いたような存在になったと、加えて、お上には逆らうまいという入居者たちの思想にも嫌気がさしたふゆで「いじなな」におられるかい！」との捨て台詞を吐き、ホームを後にしたのです。平成十五年（二〇〇三年、七十四歳の春でした。

● 若い頃の同棲と第一の青春

このとき私の言動に共鳴して行動を共にしてくれたのが、このホームでいつも隣り合って食事し、他の人のおかずを「食べへんのやったらおくれな」と私に回してくれるなど献身的な好意を示してくれていた五歳上の女性・笹岡キヌ子でした。私は彼女と連れ立って西成区岸里のアパートに移り、そこを愛の巣として若い

←枚方市星ヶ丘の老人ホームで一緒に食事をする私と笹岡キヌ子（平成十四年秋）



くの同棲を開始。気の合った異性との二十四時間、身も心も一体となった新生活は、私に第一の青春をもたらしてくれました。

それまでも、既に語ったように、三十代のころ、女性から押しかけられる形で、三〜四人

の女性と同棲したことはありませんでしたが、私の気まぐれや相手の身勝手、またお互いの人生観の違いなど、原因は様々ながら、どれも長続きはしませんでした。が、過去に世帯を持ったものの、亭主に死に別れ、子や孫との交流もあるキヌ子には、人生の酸いも甘いも噛み分けた大らかさと温かみがあり、また私の長所だけでなく短所もすべて分かった上で尽くしてくれる安心が感じられたのでした。

● 年金とキャンブルで気楽に

そして、そのした生活を五年ほど続けた平成二十（二〇〇八）年春、鶴見区横堤の保育所の上の市営住宅に移りましたが、一年ほどで立ち退きになったため、八十歳になった平成二十一（二〇〇九）年春、同じ鶴見区諸口にある現在の市営住宅に転居。この平成十八（二〇一六）年で七年になります。

そして冒頭で語ったように、わずかな年金を糧に、病床のキヌ子を見舞い、自らも介護サービスを受けながら、相変わらずの公営キャンプに通い、しょっちゅう訪ねてくる年下の友人と交わす昔話を楽しみに、気楽な老後を過

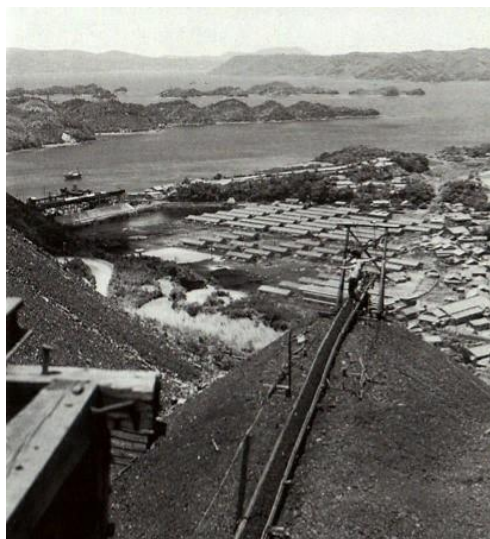
ております。

● 自彊館や老人ホームとの交流も

ところで、私の人生の大きなエポックとなった、あの大阪自彊館ではその後、館内を幾つかに分けて、それぞれを「甲子寮」「白雲寮」「自彊寮」などと呼ぶようになり、そのOBSによって「甲会」などと呼びつけた同窓会が作られたのですが、私は大阪自彊館を出て数年後、その甲会の会長に推され、いったん退任した後、十年ほど前からは名誉会長に祭り上げられ、微力ながら会の存続・発展に尽力してきました。年に何度かある会合などで、入所時代の仲間や卒業者たちと、サークル活動やイベントに力を合わせた当時の思い出をあれこれ語り合つのは、この上ない楽しみとなっています。

ちなみに大阪自彊館の理事長には、私が入所した昭和四十八（一九七二）年頃には、同館の土台を築いた初代・敏男氏に代わって息子の頼生氏が就いておりましたが、平成十三（二〇〇一）年からは孫の和生氏が継承しておられます。それから、あの食事クラブで退所した老人ホームですが、その後、敬老会や花見会などの

←私の心にいつまでも残る長崎・鹿町炭鉱のボタ山風景。その空はいつも晴れていた



催しがある度に「よかつたら参加して下さい」となると誘いがあるのは、やはり私の言動にそれなりの何かを感じてくれていたのかも知れないと考えると、恩讐を越え、わだかまりを捨てて、今も交流を続けています。

● 長崎は今日も晴れたった

さて、その時その時を思つがままに、目一杯また後悔することなく生きてきた私ですが、その八十余年の人生を振り返った時、ひととき強く思い出されるのは、やはり生まれ故郷・長崎で

の生活です。恐らくは戦後、実に多くのひとと巡り合い、悲喜交々を共にした、この大阪の地で人生を終える心づもりですが、心の中にはいつも、その原点となつた鹿町炭鉱の人々との思い出が走馬灯の如く色鮮やかに流れ続け、ガキ大将だったころにボタ山から眺めたマッチ箱のような炭鉱住宅、そしてその上を抜けるように晴れ渡った青い空が、どこまでもどこまでも広がっているのです。（おわり）

（二〇一五年七月九日聴き取り 文責：青木健一）



より良い 余生のために 自叙伝を！

芸術の世界でそれなりに実績を積み、環境保護など社会貢献もしてきたと自負していましたが、一度これまでを振り返り、今後の跳躍台にしたいと冊子化を依頼しました。他人に聴いてもらうことで新たな発見もあり、それ自身が貴重な体験でした。（60代女性）

400字（原稿用紙1枚）で千円が標準料金です。

お話をききとり、冊子にしてお渡します。

★文書全般の代筆も承ります★

港新聞・飯田編集事務所 ☎6571-4636